

interview

# 社会貢献の世界でこそ プロフェッショナルであれ

意欲あるビジネスパーソンが集う  
多摩大学大学院。  
その看板講義といえば、  
田坂広志教授の「社会起業論」である。  
日本における社会起業論の  
第一人者である田坂氏に  
ビジネスパーソンが  
働き方を見つめ直すための  
土台となる考え方を聞いた。

取材・文／東雄介 撮影／柳内正義

# 広志

# 社会貢献の第一歩は 今の仕事を見つめ直すこと

1960年代末から70年代にかけて、全国に学生運動の嵐を巻き起こしながら、現実には社会を変えることができなかった団塊の世代。彼らの多くは、残念ながら、大学卒業とともに社会変革の志を失っていき、「会社のために」生きる人生を選びました。今の50代は、そんな団塊世代の後ろ姿を見て育った世代。そのため、社会変革などできないという無力感にとらわれた世代「アバシー（政治的無関心）の世代」と評されることもありました。

しかし、その50代が、定年を前にして、「会社のため」から「社会のため」へと意識を転換し、NPOやソーシャルベンチャーを起こして社会に貢献する働き方、すなわちコロザシゴトを始めようとしています。

そのことに、私は心からの賛辞を送りたいと思いますが、敢えて5つこのことを申し上げます。

第1に、そもそも、我々がこれまでの数十年、会社で取り組んできた仕事は、社会貢献の仕事ではなかったのでしょうか。

なぜなら、かつて松下幸之助をはじめとする多くの経営者が志した日本型経営とは、「会社のために」働くことが、すなわち「社会のため」であるという深い思想に基づくものだったからです。「会社のため」に働くことと「社会のため」に働くことが対立的なものであるとの思想は、実は、米国型経営が日本に持ち込んだ「現代の病」ではないでしょうか。

日本型経営とは、次の3つの言葉に象徴されます。「企業は、本業を通じて社会に貢献する」「利益とは、社会に貢献したことの証である」「企業が多くの利益を得たということは、その利益を使ってさらなる社会貢献をせよとの、世の声である」この日本型経営の思想に基づくなら

らば、株式会社であっても、NPOであっても、「社会のために」働くことには全く変わりはありません。現在働いている株式会社を辞めてNPOに移らなければ、社会貢献の仕事ができないわけではないのです。

されば、もし我々が、本当にコロザシゴトをしたいと願うのなら、まず、今この瞬間に、現在働いている会社の中で、日々の仕事を通じて社会貢献を目指すべきなのです。

そもそも、日本型経営において、「働く」とは、「傍」（はた）を「楽」（らく）にすること。それは、誰かの幸せのために、そして、良き社会のために行う営みなのです。

そして、たとえ株式会社であっても、日々の仕事を通じて社会に貢献するという働き方と生き方を貫いたとき、それが我々の中に揺らがぬ「志」を育て、定年後、NPOに移ったとき、その「志」が、大きな花を咲かせるのでしよう。

Tasaka  
Hiroshi

シンクタンク・ソフィアバンク代表  
多摩大学大学院教授

# 田坂

Tasaka  
Hiroshi

第2に申し上げたいのは、これまでの会社生活の中で、どれほどのプロフェッショナル・スキルを磨いてきたかを、客観的に自己評価することです。なぜなら、志だけでは社会は変えられないからです。我々がNPOやソーシャルベンチャーで働くようになったとき、そこで求められるのは、NPOのメンバーを部下のように使う管理職ではありません。一人ひとりが平等なメンバーとして、目の前の仕事を見事に成し遂げるプロフェッショナルであることが求められるのです。例えば、企業で営業職を経験した人がフェアトレードのNPOに参加したならば、そのフェアトレード商品を、いかにうまく販売できるかが問われるのです。

そして第3は、これまでの仕事を通じて磨いてきた自分の「人間的魅力」や「人間力」を、深く見つめることです。

これまで我々が働いてきた民間企業においては、「組織の上司だから」「予算と権限を持っているから」と

いった理由で、多くの人が動いてくれました。しかし、NPOやソーシャルベンチャーは、資金もなければ組織も小さい、そして、ブランド力もない。そんな状況のなかで、我々は、多くの人々と企業の協力を得なければなりません。

そこで求められるのが、我々の人間的魅力であり、人間力なのです。そもそも、NPOやソーシャルベンチャーの世界で動いているのは、「ボランティア経済」Ⅱ「善意の経済」と呼ばれるものです。善意や好意で、相手に貴重なものを贈るといふ経済原理です。その典型例が、コンピューターのOS「リナックス」の開発。この発案者のリーナス・トーバルズは、誰もが自由に無償で使えるOSを作り、世界中の人々が喜ぶ姿を見たかったのでしょう。その人柄に感銘を受けたからこそ、世界中の優秀なコンピューター・エンジニア数千名がネット上にボランティアで集まり、その開発に参加したのです。定年後、大企業の資金や組織や看

プロであること  
人間的魅力があること

板に頼ることなく、人間的魅力によって多くの人々に集まってもらい、良き仕事を成し遂げていく。将来、そうした働き方を実現するためには、何よりも、現在の会社の日々の仕事を通じて自分を磨いていかなければなりません。そして、だからこそ、NPOやソーシャルベンチャーへの道は、人間として大きく成長していくことのできる、素晴らしい道なのです。





たさか・ひろし  
シンクタンク・ソフィアバンク代表／多摩大学大学院教授

1951年生まれ。74年、東京大学工学部卒業。81年、同大学院修了。工学博士。同年、民間企業入社。87年、米国シンクタンク・バテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。2000年4月、多摩大学大学院教授に就任。同年6月、シンクタンク・ソフィアバンクを設立、代表に就任。03年7月、社会起業家フォーラムを設立、代表に就任。2011年3月から9月まで、内閣官房参与として、福島第1原発事故への対策、原子力行政の改革と原子力政策の転換に取り組む。

# 人生に無駄なことなどない すべての出来事に、意味がある

第4に申し上げたいことは、これまでの仕事を通じて、人間の弱さや組織の矛盾を深く見つめてきたかということです。

そもそも、人間とは不完全な存在。その人間がつくる組織は、当然、さまざまな問題を抱えています。どれほど高邁な社会貢献の理念を掲げて、現実には、理想とかけ離れているものです。それは、NPOやソーシャルベンチャーも例外ではない。問われているのは、そうした現実の矛盾の中でも、決して失われない理想や志を持っているかなのです。いや、理想や志とは、その泥まみれの現実によっても失われなかったとき、初めて、それを理想や志と呼ぶのでしょうか。もし我々の抱えている理想や志が、現実の矛盾の前で、簡単に色あせてしまうものであるならば、それは、単なる夢想や野心であったということなのです。

第5に申し上げたいのは、「人生において起こることには、必ず意味がある」ということです。我々が、かけがえのない人生において、その会社に縁を得たこと、職場で多くの人々と巡り会ったこと、それらは、すべて、深い意味があるのです。

私自身、今、そのことを痛感しています。私は、これまで、「60歳になったら真のライフワークに取り組みよう」と考えてきました。そして、60歳までは、そのための修行の時代だと思いつめてきました。

しかし、人生とは本当に分からないものです。その60歳になる直前に東日本大震災が起き、私は内閣官房参与として原発事故対策に取り組むことになりました。もとより、それは国難と呼ぶべき大災害であり、選択の余地がないほどの重大な任務でしたが、一方で、60歳になったらと計画していたライフワークもありま

した。しかし、そのとき、天の声が聞こえたような気がしたので。「若き日のお前が原子力の安全研究に打ち込んだのはなぜだ」「この日のためではなかったのか」という声です。確かに、21年前に離れた原子力の分野に戻ることは、全く予想していなかったことですが、心の深いところで、「人生において起こることには、必ず深い意味がある」と思い、それを天の配剤として受け入れる気持ちがあるのです。

50代から始めるココロザシゴト。その最高の例を挙げるならば、マイクローファイナンス・インターナショナル・コーポレーションの柘迫篤昌さんでしょう。東京銀行在籍中の26歳のとき、メキシコの貧困を目の当たりにした柘迫さんは「いつか彼らを支援する金融サービスを立ち上げよう」と志しました。それから25年の歳月を金融のプロとして腕を磨くことに費やし、51歳のとき、ついに起業を果たしたのです。

数十年の歳月、会社員として腕を磨き、人間を磨き、50代になって、いよいよココロザシゴトへの第一歩を踏み出す。それは、素晴らしい第二幕の幕開けでもあるのです。